『一条摂政御集』の一考察

――『とよかげ』の日記文学的特質――

下浅千穂

一、

『一条摂政御集』（一名『とよかげ』）は、藤原伊尹の広範囲に亙る恋愛を、「とよかげ」という仮名（かめい）を使って記した私家集である。これまで、本作品は歌物語的であるという点ばかりが注目されてきた。しかし、私は、私家集『一条摂政御集』の中にある記録的な部分、つまり、日記的部分に焦点を当てて考えてみようと思う。

私家集には多かれ少なかれ、日記的部分がある。それは、私家集が個人の集であるから、おのずと生活記録的な要素を持つためであろう。そのため、恐らくは実際に起こった出来事を記すことに主眼のある日記文学との違いも、盛んに論じられてきた。私家集と日記文学との区別は、まず前者が「某集」、後者が「某記」・「某日記」という名称の違い、また、詞書と和歌の多少、さらに和歌が二字上げか、二字下げかでなされる。これらは形式上の違いであるが、結局は、和歌に重きを置くのか、詞書に重きを置くのか、ということになる。

しかし、例えば『成尋阿闍梨母集』は、見出しが「延久三年正月卅日」とあり、内容が記録性の濃いものでありながら「集」と呼ばれ、『和泉式部集』は『和泉式部日記』から殆どの和歌が採られている。また、『四条宮下野集』、『建礼門院右京大夫集』は、主人にお仕えする日々を記すという女房日記の側面を持っている。詞書、和歌の比重も様々である。

『四条宮下野集』には、

めでたくおかしきことゞもを、みてのみやむがあかずおぼえしかば、いと事ゆかずあやしうものにかきつけてありしを、たびゞ〳〵のひにうせにしかば、のち〳〵は、としつもり、ものうくなりてやみぬるに、こえ

ずはのちのとおぼしたる人の、思いでゝかきつけよとあるにもよをされてかきつくれば、ひとの御をかしかりしことゞもはわすれはてゝ、わがあやしきことゞものみおぼえて、ほの〴〵、それもかたはしばかり、ひが事おほくや[1]

と、お仕えした日々のなかで自分に起こった出来事を書く、という意識が見られる。

『建礼門院右京大夫集』にも、

家の集などいひて、歌よむ人こそ書きとどむることなれ、これは、ゆめゆめさにはあらず。ただ、あはれにも、かなしくも、なにとなく忘れがたくおぼゆることどもの、あるをりをり、ふと心におぼえしを思ひ出でらるるままに、我が目ひとつに見むとて書きおくなり。

われならでたれかあはれと水茎の跡しも末の世に伝はらば[2]

とあり、歌集という形式で自分史を書き記す、ということが作者の意図するものであった。

女房として主人にお仕えする日々を書き記すということは、結局、公に仕えるということだから、今言う「私的」なものは厳密にはないにしても、主人にお仕えすることこそが、まさに彼女たちの「私的」な部分なのであった。歌を集めた歌集であれ、日々の記録を集めた日記であれ、残るものは作者一個人の存在証明である。

作者の意識が歌人として歌の集を残すことにあったのか、あるいは歌人という意識はなく、歌集という形式を使って自分史を残すことにあったのか。己の存在証明を効果的に遺すために、どちらの方法を採るか、という選択がなされたに違いないが、私家集と日記文学とを形式上から、また内容からはっきりと区別することは困難なのである。それを示すものが、後世の人々が書き写す過程で、それぞれを「集」や「記」・「日記」と分けて受けとってきた事実である。表題の違いである。恐らく、私家集の側面と、日記文学の側面との比重によるものだろう。「日記文学的私家集」

とか、「私家集的日記文学」とするのが穏当である。[3] 従って、私家集と日記文学とを区別して考えるよりも、一方に他方の側面がどのように見られるのか、という点を考察することこそが有効であると考えられる。

そこで、本稿で採り挙げる『一条摂政御集』であるが、「とよかげ」という仮名を使って記したものである。仮名とは、実名の知られることを避けるため、用いられるものである。実名では記せないことを記したい、という伊尹の欲求の現れである。この、仮名を使って記す、という点は、私家集の中に見られる日記文学の一側面と考えられないだろうか。

本稿では、『一条摂政御集』本文の読解を通じて、仮名を使って記す意味を考察する。そして、それが『一条摂政御集』における日記文学的特質であることを述べ、私家集と日記文学との関係を理解する一助としたい。なお、『一条摂政御集』の日記的部分には、月、季節などの明確な時間的推移によって配列された章段もあるが、本稿では、「とよかげ」に起こった出来事の顛末を記した章段を取り挙げる。

二、

周知の通り、『一条摂政御集』（以下、『御集』と略す）は、一般に三部構成と言われている。第一部（一～四一番歌）が伊尹自撰部、第二部（四二～一九二番歌）は他撰部、第三部（一九三、一九四番歌）は定家の補入であろう。『御集』での主人公の呼称は、第一部では「とよかげ」（一一例）、「おきな」（一〇例）であるが、第二部では「おとど」に変わる。これは、第一部では「おきな」である「とよかげ」を描くこと、つまり伊尹自身を描くことが中心であり、第二部では他者からみた「おとど」伊尹を描くことが中心であることを示している。これは第一部を伊尹自撰

部、第二部を他撰部とする根拠とも言えよう。

ところで、『御集』には、「伊尹＝とよかげ」とはどこにも記されてはいない。あくまで「とよかげ」という男の恋愛を記したもの、と読まねばならないかも知れない。しかし、『大鏡』や『奥儀抄』にあるように、この『御集』が一名『とよかげ』と呼ばれていたこと、また、伊尹が編纂中心者であった『後撰和歌集』やその他の勅撰集に、『御集』の歌が採られていることから、少なくとも当時の人々は「伊尹＝とよかげ」であると認識していたと思われる。よって、「伊尹＝とよかげ」と見て、『御集』は伊尹の恋愛を記したもの、として良いだろう。

さて、主人公「とよかげ」については、『御集』序に、

おほくらのしさうくらはしのとよかげ、くちをしきげすなれど、わかゝりけるとき、女のもとにいひやりけることゞもを、かきあつめたるなり。おほやけごとさわがしうて、をかしとおもひけることゞもありけれど、わすれなどしてのちにみれば、ことにもあらずぞありける。(4)

と記されている。主人公の男は「大蔵史生倉橋のとよかげ」という「口惜しき下衆」との設定になっている。現実の伊尹は、摂政太政大臣という身分の人物で、実際と全く正反対の「口惜しき下衆」に設定したのは、自分をみすぼらしく、目立たなくするためである。(5) これは近世歌舞伎で、金持ちの若旦那が勘当されたりして、姿をみすぼらしく変えた「やつし形」にも受け継がれて行く。「やつし」は、あまりに規制された現実から逃避し、仮の自分を創り出すことで、視野、行動範囲に自由さを求める人間心理の顕れであろう。なお、伊尹の叔父にあたる師氏の家集『海人手古良』も、身分を「海人」に設定した「やつし形」である。(6)『奥儀抄』には、「海人手古良師氏大納言撰」とあり、書陵部蔵本（五〇一・四四八）には、「海人手古良大納言師氏卿仮名也」(7)とあって、偶然にも本稿で考察する仮名の問題をも所持している。この『海人手古良』については、別に考察したいと思う。

次に「おほくらのしさうくらはしのとよかげ」という命名についてであるが、これは多くの先学によって推測されてきた。「大蔵史生」という位は、「……身分は低くても、実収入の多い役、あるいは蓄財者というイメージが一般にあったとするならば、この物語の作者が、身分は低くとも、自由な色好みがなしうる人物の職[8]、「下級の女房やその局に仕へる程度の女房の関心をひき得たのかも知れない[9]」ものであったとするのが穏当だろう。「倉橋」は、藤原氏ゆかりの地であることから、伊尹が藤原氏の血を引く者としての自覚と誇りによるものとされている[10]。「豊蔭」は、「倉橋」の「クラ」が「闇」や「暗」をイメージさせ、豊かな「蔭」となり、またその音「ブイン」が伊尹の音「イイン」に通ずるとするもの[11]、藤原氏という豊かな花蔭にいる者、「蔭」には「蔭子」という関連も含まれる、とするもの等[12]がある。更に、『宇津保物語』の「俊蔭」にも響きが似ているようにも思えるが、いずれにせよ、『御集』において「とよかげ」という呼称が何らかの読み方を限定するものだとは考えられない。名が暗示するものよりも、「おとこ」ではなく「とよかげ」としたことが重要なのである。「とよかげ」というありそうな名を使うのは、リアリティを出すためであり、また、名を付けるのならば、決して伊尹だとはわからない名を付けたと見るほかないだろう。

問題は、伊尹がなぜ「とよかげ」という仮名を使って記したのか、ということである。言いかえれば、なぜ「とよかげ」というもう一人の自分を作ったか、である。この問いについて、『御集』伊尹自撰第一部のうち、第二段、第三段の読解を通じて、考察したいと思う。

三、

【第二段】

みやづかへする人にやありけん、とよかげ、ものいはむとて、しもにこよひはあれ、といひおきてくらすほ

どに、あめいみじうふりければ、そのことしりたる人の、うへになめり、といひければ、とよかげ、

をやみせぬなみだのあめにあまぐものゝぼらばいとゞわびしかるべし

なさけなしとやおもひけん。

第二段の概要は、とよかげがある宮仕えする女と逢うため、今夜は下の局にいるように、と言っておいたのだが、ひどく雨が降ってきてしまったため、女は来なかった。二人の仲を知っている人が、「御前のようです」と知らせる。とよかげは、女に逢えない嘆きの歌を詠った、とある。従来の解釈では、宮中と女の局との距離が遠いため、女は雨に濡れるのを避けて下りなかった、とされてきた。[13] しかし、ここで私が問題にしたいのは、仮名を使ったという点を重視すると、他にも女の来なかった理由が考えられるのではないか、ということである。この点については、後に考えたいと思う。

先に第三段から読解を試みたい。

【第三段】

おなじ女に、いかなるをりにかありけむ、

からころもそでに人めはつゝめどもこぼるゝものはなみだなりけり

女、かへし、

つゝむべきそでだにきみはありけるをわれはなみだにながれはてにき

としをへて、上ずめきたる人の、かういへりけるに、いかばかりあはれとおもひけん、これこそ女はくちをしうも、らうたくもありけれ。

女のおやきゝて、いとかしこういふ、ときゝて、とよかげ、まだしきさまのふみをかきてやる。

ひとしれぬみはいそげどもとしをへてなどこえがたきあふさかのせき

これをおやに、このことしれる人のみせければ、おもひなほりて、かへりごとかゝせけり。はゝ、女にはら

へをさへなむせさせける。

あづまぢにゆきかふ人にあらぬみはいつかはこえんあふさかのせき

心やましなにとしもへたまへ、とかゝす。

女かたはらいたかりけんかし。人のおやのあはれなることよ。

第三段の概要は、第二段と同じであろう女が、

からころも……（人目を忍んであなたを想っていますが、涙だけは人目についてしまう程、こぼれています。）

というとよかげの贈歌に対して、

つゝむべき……（私の方は涙を隠す袖すらありません。あなたをひたすら想って、涙で流れてしまったのです。）

という返歌をよこす。そこでとよかげは、長年上品ぶっていたが、可愛い所もあるな、と再び女に惚れ直すのである。しかし哀しいことに、そんな二人の仲を、女の親が快く思っていない、ということを聞いたとよかげは、

ひとしれぬ……（人に知られぬように、この身はあなたに逢いたいと急いでいるのですが、逢えずに数年経って

しまった。それでもどうして、あなたに逢うための逢坂の関は越えられません。）

と、まだ深い関係ではない、という内容の歌を贈った。そこで、女の親は安心して、女に返事を書かせ、母親は女に再び恋心が起きないように祓いまでさせる。その返歌には、

あづまぢに……（東国へ往来する人でもないあなたが、いつ逢坂の関を越えることがありましょうか。）

とあった。女は端から見ていて心苦しい。人の親というものは、子供が何をしているのかも知らずに心配し、一生懸命になる。切ないものだ、とある。

ところでこの第三段の話は、『宇治拾遺物語』第五一話（巻三の一九）「一条摂政歌の事」にも採られている。小異はあるが、内容に大きな違いはない。念のため、全文を次に引く。

今は昔、一条摂政とは東三条殿の兄におはします。御貌より始め、心用ひなどめでたく、才有様誠しくおはしまし、又色めかしく、女をも多く御覧じ、興ぜさせ給ひけるが、少し軽々に覚えさせ給ひければ、御名を隠させ給ひて、大蔵の丞豊蔭と名のりて、上ならぬ女のがりは、御文も遣はしける。懸想せさせ給ひ、逢はせ給ひもしけるに、皆人さ心得て、知り参りたり。

やん事なく、よき人の姫君の許へおはしまし初めにけり。乳母、母などを語らひて、父には知らせさせ給はぬ程に、聞きつけて、いみじく腹立ちて、母をせため、爪弾きをして、いたくのたまひければ、さる事なしと争ひて、「まだしき由の文書きて給べ。」と、母君の侘び申したりければ、

人知れず身は急げども年を経てなど越え難き逢坂の関

とて遣はしたりければ、父に見すれば、さては虚言なりけりと思ひて、返し、父のしける。

あづま路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えん逢坂の関

と詠みけるを見て、ほゝ笑まれけんかしと、御集に在り。をかしく。(14)

一応、概要を述べる。伊尹は、多くの女と交渉を持っていたが、他人から見れば自分の行動が少し軽率に思われたので、名前を隠し、「とよかげ」と名乗って、身分の高くはない女とも文を遣わしたり、逢瀬を重ねたりもした。周り

の人々もそのように心得ていたのだった。伊尹は、ある高貴な女と通じていた。母親、乳母には話しをしてあったが、父親には教えていなかった。しかし、二人の仲を知った父親は激怒し、母親をひどく責め立てた。そこで母親は、伊尹に「まだそのような仲ではないという文を書いて下さい。」と頼んだ。早速、伊尹は「人知れず……」の歌を贈るが、父親は、それが嘘であることを見抜き、女に代わって「あづまぢに……」と詠んでよこした。それを見て、伊尹は思わず苦笑してしまった、という笑話である。

とよかげと女が、女の両親を欺いたことは『御集』と変わりないが、この『宇治拾遺物語』の方が簡潔に記されており、『御集』を理解するのに役立つ。『宇治拾遺物語』はもちろん『御集』より後の成立であるが、後に成立したからといって、全てが脚色されたものであるとか、創り変えられたものであるとは断言できない。逆に、後日談として情報が増えたりして、より詳しく書かれている可能性もある。この話が『宇治拾遺物語』に採られたのは、それだけ人々の間で有名な話だったからであろう。よほど些細な部分は別だが、有名な話、誰でも知っている話が大きく創り変えられるとは思われない。『宇治拾遺物語』がより詳しく書かれている可能性がある限り、第三段を『宇治拾遺物語』から考えても差し支えはないだろう。

さて『宇治拾遺物語』では、女の母親、乳母は二人の仲、「とよかげ」が伊尹であることを知っており、父親だけがその事実を知らなかった、とある。『御集』で言うならば、両親は「とよかげ」が伊尹であることを知らず、女だけが知っていた、と読む事ができよう。両親にとって、とよかげは「口惜しき下衆」でしかなかったのである。当然ながら、女の両親が、自分の娘に身分の低い「とよかげ」が通うことなど、快諾するはずがない。そこで両親の心境を考えて、「あづまぢに……」の歌を見ると、京から「あづまぢ」を越えるのは、東国へ行く場合、つまり国司として地方

へ赴任する場合である。国司は四等官に入るが、史生は主典の下である。国司にもなれない身分では赴任することもないのだから、逢坂の関を越えることもない。はっきり言えば、そんな身分の低い男には、娘に通わせることは出来ない、と言っているのである。ゆえに、「とよかげ」が伊尹であることを知っている女は「かたはらいた」かったのである。実は、とよかげはあの伊尹殿で、身分の高い御方なのですよ、と心の中で思ったことだろう。『宇治拾遺物語』では、女ではなく伊尹が、自分は摂政にもなりうる身分の男なのだが、と苦笑したとある。

この、身分を隠したために見下げられ、恋がうまく行かなくなってしまった、という恋愛の失敗談は、伊尹の隠れた一面を示していよう。

ところで、この第三段の女は、『後撰和歌集』[15]に、

女のもとにつかはしける　　これまさの朝臣

人しれぬ身はいそげども年をへてなどこえがたき相坂の関

返し　　小野好古朝臣女

あづまぢにゆきかふ人にあらぬ身はいつかはこえむ相坂の関

とあって、小野好古の女となっている。『御集』を見てゆくと、次の段にも小野好古とその女との交流が記されている。

【第二六段】

四ゐになりたまへるよろこびにおはしたりけるに、やさいしやうのむすめやないしにすみたまひしが、うせてのち、さいしやうなきて、

むらさきのふかきころものいろをだにみでわかれにし人ぞかなしき

かへし

むらさきのいろにつけてもねをぞなくきてもみゆべき人しなければ

【第二七段】

この御めのないしうせて、おぼしなげきしに、人のとぶらひきこえけるに、

いままでにそであらばこそなみだがははやくみくづとなりにしものを

【第三九段】

あひたまひてのちに、やないしのもとこもりおはして、うちにうちに、とあるに、きたのかた、

ももしきはをののえくたす山なれやいりにし人のおとづれもせぬ

【第一〇七段】

やだいにのいへにて、ひさしうおはせねば、うへ、

ねざめするやどをばよきてほととぎすいかなるそらにかきねなくらん

右に挙げた段には、伊尹が好古女・野内侍に通った、とある。これらの段から、問題の第三段との関連も考えることが出来る。つまり、第三段の時点で、好古は「とよかげ」が伊尹であることを知らなかった。後に判って、それならば、と喜んで娘のもとに通ってもらったのではないだろうか。[16] 第二六、二七段では野内侍の死が記され、伊尹の哀しみが描かれる。「四ゐになりたまへるよろこびにおはしたりけるに」とあるのは、伊尹が昇進したことを示す。四位に与えられる色は「深緋」であるが、和歌の「むらさきのふかきころものいろ」は、将来の昇進（一位は深紫）を暗示したものであろう。[17] 第三段の出来事があったからこそ、心配をかけた好古女には四位となった自分の晴れ姿を見て欲しかった。その哀しみである。先の『宇治拾遺物語』の場合と同じように、他撰部にあるこれらの話は、後になって情報が増え、真相が明かされたものだろう。伊尹自撰部第三段の女が好古女であること、二人の仲を引き裂いたの

は好古であった、という、いわば「種明かし」の役割を果たしているのである。女との仲を女の両親に裂かれる、というスキャンダルでありながら最も人間味溢れる失敗談を、伊尹が記すためには、仮名を使って身分を低くする必要があった。他撰とはいえ、失敗談の後に成功した「とよかげ」の姿を記しているのは興味深い。

繰り返しになるが、伊尹が「とよかげ」という仮名を使った点を重視し、伊尹が何を書きたかったのかを考える必要があるだろう。すなわち、実名ならば、将来、摂政となるべき身分の高い男が、そう高くはない身分の女との恋愛、失敗談を書くのは憚れる。伊尹は、忠平を祖父に、師輔を父に持ち、いずれは摂政となりうる人物である。父の代から、権力争いは泥沼の様を呈し、必死で勝ち取った貴重な血統である。先の『宇治拾遺物語』に、「……御貌より始め、心用ひなどめでたく、才有様誠しくおはしまし、又色めかしく、女をも多く御覧じ、興ぜさせ給ひけるが、少し軽々に覚えさせ給ひければ、御名を隠させ給ひて、大蔵の丞豊蔭と名のりて……」とあるように、私生活の面でも、政治の面でも、勝手気ままな振る舞いが規制されていたことは、容易に想像が付く。それゆえに仮名を使い、推測するに、中流くらいの宮仕え女房と交渉をもち、その恋愛を記したのではないだろうか。

さて、戻って第二段である。これもやはり身分を隠し、「とよかげ」という仮名を使ったからこそ記せたものだと思われる。すなわち、あとで行くから待っていなさい、と言ったのに、女が下に降りなかったのは、雨が降っていたからだ、という他に理由が考えられそうである。雨が降っていても、逢いたいのなら女を待っていればよい。二人の仲を知っているという、「上になめり」と言った人物（恐らく女の同僚だろう）に呼んで来て欲しい、待っているから、と頼むこともできたはずである。女は逢わない、とは言っていない。下に降りることが出来なかっただけである。と

よかげは、

おやみせぬ……（そなたに逢えずに、私の涙は少しも止むことはない。そなたが天雲のように天上に昇ったままなら、ますます耐え難いことだ。）

の歌を詠む。「のぼらば（昇ったままなら）」から、「とよかげ」は女との仲がこれっきりになるとは確信していない。待っていれば来るかも知れない。しかし、今日の逢瀬は諦めた方がよさそうだ、と思ったのである。

ではなぜ、とよかげは諦めたのだろうか。今日の逢瀬を諦めねばならない理由が雨だったとは思えない。やはり、何か他に、とよかげにもすぐに判る理由があったのである。

恐らく、とよかげは女が誰か別の男に逢っている、と思ったのではないだろうか。女はまだ上（宮中）にいる。その状況から、とよかげがはっとした男。では、その男とは誰なのだろうか。「とよかげ」と仮名を使わなければ書けない人物。かつ、伊尹でさえもかなわない、諦めよう、と思わせる人物であろう。それは、「あまぐもの」が暗示してくれている。「あまぐも」は、心を覆うもの、隔てるもの、手の届かぬ遠い存在、男女の浮気な様を詠んだものなど、恋を詠んだものに多い。しかし、『万葉集』には、[18]

……天地の　寄り合ひの極み　知らしめす　神の尊と　天雲の　八重かき分けて　神下し　いませまつりし　高照らす　日の皇子は……（巻第二・一六七）

大君は　神にしませば　天雲の　五百重の下に　隠りたまひぬ（巻第二・二〇五）

大君は　神にしませば　天雲の　雷の上に　廬りせるかも（巻第三・二三五）

など、天皇が天つ神の子とする歌が見られ、そこでは「天雲の」が用いられている。そもそも『古事記』上つ巻・天降の条に、[19]

故爾くして、天津日子番能邇々芸命に詔ひて、天の石位を離れ、天の八重のたな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天の浮橋に、うきじまり、そりたたして、竺紫の日向の高千穂の久士布流多気に天降り坐しき。

とあって、「あまぐも」は天つ神＝天皇をイメージさせるものだったのである。

この「おやみせぬ……」の「あまぐもの」には、とよかげに涙の雨を降らせた「雨雲」、宮中へ昇ったままの女を示す「あま雲」と、女を引き止めている天皇を示す「天雲」という三つの意味が掛けられているのである。とよかげには、この歌を詠まねばならない、今日の逢瀬を諦める確固たる理由が判っていたのである。やはり、女は別の男と逢っていて、下に降りたくても降りることが出来なかった。その相手とは、天皇ではなかったろうか。

後の作品になるが、『讃岐典侍日記』には、

いそぎまかでんと思し夜のことぞかし。宮の御かたにわたらせたまひて、夜のふくるまでかへらせたまはざりしに、からうじて待ちつけまゐらせて、すすめまゐらせしを、いかで心えさせたまひたりしにか、まかづることおほせられしかば……[20]

という記述がある。讃岐典侍は鳥羽天皇の侍寝の後、別の男に逢いに行った、とする説がある。[21] また、『平家物語』巻第五「富士川」に、

薩摩守忠度は、年来ある宮腹の女房のもとへかよはれけるが、或時おはしたりけるに、其女房のもとへ、やンごとなき女房まらうときたッて、やゝ久しう物語し給ふ。さよもはるかにふけゆくまでに、まらうとかへり給はず。忠度軒にしばしやすらひて、扇をあらくつかはれければ、宮腹の女房、「野もせにすだく虫の音よ」とゆふにやさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇をつかひやみてかへられけり。……[22]

という話がある。松本寧至氏は、「やンごとなき女房」が『源平盛衰記』では「高倉院」となっていること、「かしが

まし野もせにすだく虫の音よ我だに物をいはでこそ思へ」の歌が、忠度、高倉院、女房の三角関係を物語り、「我だに物をいはでこそ思へ」は、客人が女房ではないことを証明している、と考証された。さらに、『今物語』では、「野もせにすだく……」と返事をしたのは「このつぼねの心しりの女房」となっていて、氏は「いわば「心知りの女房」は巫女的存在であるから、代理とはいえ同一人格とみてさしつかえない。」とされる。[23]『御集』第二段の「上になめり」と言った「そのことしりたる人」も、女と同一人格と見てよい。事情を知っているからこそ、「御前のようです」というぼかした返事をしたのだろう。また藤原隆房の『隆房集』にも、次の記述がある。

あながちに嘆くを、いとほしとや思ひけむ、「しかるべきにこそあらめ。立ちながらいはむ。そこに待て」といひしかば、いと〳〵うれしくて、待ちゐたりしかど、有明の月も入り方になりて、夜も明けにしかば、泣く泣く帰るとて

待ちかねて明くればともにかゝりけり涙は袖に月は山べに[24]

これも、小督が高倉天皇のお相手のため、約束の場に現れなかったのだろうと考えられる。[25]やはり、『御集』第二段の話も、右に挙げたような、天皇のお相手をしていたために、約束を守ることが出来なかった、という状況であったことは推測し得る。

伊尹は、「とよかげ」という仮名を使うことによって、憚られるような出来事、つまり自分が通っていた女を天皇が寝取ってしまった、という天皇の好色さと、がっかりさせられた自分の滑稽さを記せたのである。

四、

『一条摂政御集』という私家集は、仮名を使う、つまり仮託の形であるがために、思わず不首尾に終わってしまった

出来事、また、実名ならばとても書けないような出来事をも記せたのである。

さて、なぜ伊尹は仮名を使ってまで書かなくてはならなかったのだろうか。身分を隠して己の行動を知られないようにするならば、書かないことが一番だろう。しかし、伊尹は仮名を使って恋愛を記した。その時点で、人目に触れることは意識していたのだと言える。後に人目に触れることをも考えて、周囲の事情から仮名を使うしかなかったとはいえ、この『御集』を記したのは、彼の内から溢れ出る、自己の存在証明という欲求だったろうと思う。自分の名を残す、自分はこう生きたのだ、ということを、最も書きやすい方法で記しておきたい。それが、『一条摂政御集』では仮名を使うことだったのである。

この、仮名を使う、仮名でなくとも何かに仮託する、という点は、他の文学作品でも大きな問題となるべきものである。例に漏れず、日記文学にもこのような表現は見られる。

例えば、『蜻蛉日記』では、道綱母は自分の呼称を「人」という三人称を使った。『和泉式部日記』では「女」、『更級日記』ではやはり「人」としている。『とはずがたり』では、作者二条と交渉を持った人物に、「雪の曙」、「有明の月」、「伏見の人」といった仮名を使っている。どれも固有名詞を出してはならない、という事情が恐らくあり、それでも自分自身を記しておきたい。では、どうしたらよいのか。固有名詞を出さずに己の体験を記す。その方法が、三人称とか、仮名なのである。仮名を使う、というところに、作者の真意を読む必要がある。『一条摂政御集』は、「とよかげ」というありそうな仮名を使うことで、一層リアリティーを増している。『とはずがたり』も、三人称ではなく仮名を使うことで、より効果的にリアリティーを獲得しているのである。

日記文学とは、自分の体験を書くものである。しかし、書けることと書けないことがある。そこで、仮名にするこ

とによって、固有名詞を出さずに記す、という問題を解決し、さらにより詳しく記すことが出来るという利点を得る。仮名は、多面性を表現することを可能にするものである。そこに、日記文学を考える上で、これから考慮すべき多くの問題が提示されていると言えよう。

本稿では、仮名を使う、ということを考えてみた。自己の体験を記す、という日記文学の特質が、私家集『一条摂政御集』では仮名を使って記す、というところに顕れているのである。

注

(1) 『私家集大成』中古Ⅱによる。なお、私に濁点を付した部分がある。

(2) 新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』(糸賀きみ江氏校注)による。

(3) 森本元子氏「女流日記文学と私家集」(女流日記文学講座第一巻『女流日記文学とは何か』勉誠社・平成三年九月)。氏は『成尋阿闍梨母集』を「私家集的日記文学」、『建礼門院右京大夫集』を「日記文学的私家集」とされる。

(4) 『一条摂政御集』本文の引用、章段分けは全て『一条摂政御集注釈』(平安文学輪読会著・塙書房・昭和四二年)による。なお、私に句読点を付した部分がある。

(5) 増田繁夫氏は、「やつし」が「それはあくまでもその卑しい姿が仮の形であり、その奥には実は高貴さや豊かさをもつ身のあることが知られていなければならない。他人に知られるだけでなく、自身も高貴さを意識し維持していなければならないのである。あくまでも「やつし」は仮の姿なのだ。」(「国文学」第三七巻第四号・平成四年)と、「やつし」の意味を考える上で、「仮の姿」の重要性を述べられている。

(6) 益田勝実氏は、「『海人手古良』と『とよかげ』とは、貴人が〈下衆の集〉をよそおってわが集を編んだ、という志向性を共有している。」(「国文学」第二六巻第五号・昭和五六年)と述べられ、注目すべきものとされる。

(7) 『私家集大成』中古Ⅰによる。

(8) 山本利達氏「大蔵史生倉橋豊蔭について」(「国語国文」一条摂政御集特集・第三四巻第一二号・昭和四〇年)。
(9) 阿部俊子氏著『歌物語とその周辺』第三章「一条摂政御集」(風間書房・昭和四四年)。
(10) 注(9)に同じ。
(11) 山口博氏著『王朝歌壇の研究』第四章「一条摂政御集論—大蔵史生倉橋豊蔭という事—」(桜楓社・昭和四二年)。
(12) 注(8)に同じ。
(13) 『一条摂政御集注釈』(平安文学輪読会著・塙書房・昭和四二年)は「この女の仕えている主人のところと、女の私室との間は、かなりの距離があり、廊下伝いに行き来することができなかった」ため、また、「雨がひどく降ったので、男は来ないだろうと思って」女が下に降りなかった、とする。新日本古典文学大系『平安私家集』の『一条摂政御集』(犬養廉氏校注)では、「御前と下局は廊下続きではなく、女は雨に降りこめられたものであろう」とする。
(14) 日本古典全書『宇治拾遺物語』(野村八良氏校注)による。なお、私に旧漢字を新漢字に改めた部分がある。
(15) 『新編国歌大観』第一巻・勅撰集編による。
(16) この一連の章段を物語の視点から虚構とする説もある。
(17) 『衣服令』「諸臣ノ礼服。一位ハ、礼服ノ冠。深紫ノ衣。……四位ハ深緋ノ衣。……」(『国史大系』)。
(18) 新日本古典文学全集『萬葉集』(小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏校注・訳)による。
(19) 新日本古典文学全集『古事記』(山口佳紀氏・神野志隆光氏校注・訳)による。
(20) 今小路覚瑞氏・三谷幸子氏著『校注讃岐典侍日記』(笠間書院・昭和五一年)による。
(21) 岩佐美代子氏「讃岐典侍日記における鳥羽帝描写　附、「いづみもわびよ」考」(「国文鶴見」第二一号、『宮廷女流文学読解考　総論・中古編』笠間書院・平成一一年)。
(22) 日本古典文学大系『平家物語』(高木市之助氏・小澤正夫氏・渥美かをる氏・金田一春彦氏校注)による。
(23) 松本寧至氏「やんごとなき女房は高倉院である—『平家物語』と『源平盛衰記』—」(「三松」第九集・平成七年)。
(24) 『今物語・隆房集・東斎随筆　中世の文学』(久保田淳氏・大島貴子氏・藤原澄子氏・松尾葦江氏校注・三弥井書店・昭和五四年)による。
(25) 拙稿「『隆房集』の一考察」(松本寧至氏編『中世文学の諸問題』新典社研究叢書・新典社・平成一二年)。